2024年３月10日（日）「ヨブは祝福されていたが……」

ヨブ 1:1-5

**1 ウツの地にヨブという名の人がいた。この人は完全で、正しく、神を畏れ、悪を遠ざけていた。
2 彼には七人の息子と三人の娘があった。 3 また、彼は羊七千匹、らくだ三千頭、牛五百軛、雌
ろば五百頭の家畜を持ち、僕も非常に多かった。この人は東の人々の中で最も大いなる人であっ
た。 4 息子たちはそれぞれ自分の日に、その家で祝宴を催し、使いを送って三人の姉妹たちをも
呼び寄せ、食事を共にするのが常であった。 5 その祝宴が一巡りする度に、ヨブは使いを送って
子どもたちを聖別し、朝早く起きて、彼らの数に相当する焼き尽くすいけにえを献げた。「もしかす
ると子どもたちは罪を犯し、心の中で神を呪ったかもしれない」と思ったからである。ヨブはいつも
このようにしていた。**

【序論】

久しぶりにヨブ記から語ろうと思いましたのは、ちょうど今、私の人生に時々襲いかかる皮膚のトラブルに苛まれているからです。10 年前にも薬害によって大変な思いをしましたが、今年もあの時と同レベルの深刻な症状に見舞われております。昨年の 10 月に使用していた薬が合わなかったようで、一旦体に吸収されたものが時間差で全身に出てきてしまいました。痛みと痒みに悶絶する日々、普段こなしていた仕事の多くができなくなり、一ヶ月以上教会に顔を出すことができないという、人生初めての経験をしております。ひたすら自宅にこもる中で、唯一学ぶ気持ちになったのがヨブ記でした。10 年前にも一度ヨブ記から語ったことがありましたが、時を経て改めて学び直し、新しい視点で丁寧に読み解いてみているところです。ヨブ記は私の人生テーマとなり、全体を説き明かしたいという思いでいますが、内容的になかなか骨が折れますので、時々機会を見つつ進めていきたいと思います。

【本論】

ヨブ記は人の人生に降りかかる「苦」の問題を扱っており、その意味が分からず苦しんできた多くの人々の共感を得てきた書です。文学としても不朽の名作であり、全体として高度な技巧が施された書でもあります。なぜこんなにひどいことが自分の人生に起きてくるのか、そのことを問い続ける人は、本書を読み、生涯かけて学ぶとよいでしょう。私もその一人として、苦しむ人々と心を合わせて学び、取り次いでいきたいと思います。

<u>本論１．ヨブ記の概要</u>

ヨブ記は、プロローグ、ダイアローグ、エピローグという三部構成になっています。プロローグにおいて、まずヨブという一人の人物の祝福された正しい生き方が示されます。その

理由は、彼に降りかかる災いの数々は、彼が神の御前に何らかの罪を犯した結果もたらされたものではないということを明らかにするためです。後ほど 1:1-5 の中身を丁寧に見てまいりますが、彼が如何に神を愛し、神を畏れ、心においても誠実に生きていたか、そして神が彼の人生をどれほど祝福しておられたかが呈示されます。ところが、そこに天上の議会の様子が示され、サタンも神の使いの一人として登場し、神を挑発します。「ヨブの敬虔さは物質的な豊かさが与えられた結果にすぎないのではないですか？それを取り去ったらヨブは本性を現すに違いありませんよ」と。神は、「よし、それならその挑戦を受けて立とう」と、サタンにヨブの家族も財産もすべてを取り上げることをよしとされます。まずここにおいて読者は一つのつまずきを覚える。神はご自分と正しい関係にある者を守ってくださらないのか、サタンにいいようにあしらわせるのかと。この問題はさておきまして、一回目の勝負は神に軍配が上がります。ヨブは一切の所有物を失っても神を呪うことをしませんでした。サタンは一旦引き下がりますが、またやって来て再度神を挑発します。「今度はヨブの健康を奪ってみましょう、そうすれば彼はいよいよ神を呪い、その敬虔は見せかけのものであったことが分かるでしょう」と。神は、「よし、それならやってみなさい。ただし、彼の命にまでは手を下すな」と、その挑戦をお受けになります。サタンはヨブの全身をひどい腫物で撃ち、肉体的苦痛の極みを味わわせます。しかし、ヨブはそれでも神を呪うことはせず、信仰に留まり続けました。そこにやって来るもう一つの試練は、ヨブの妻がつまずいたことです。彼女は「そんな目に遭ってまでまだ信仰を堅く保つのですか。神を呪って死になさい」と、まさにサタンの言葉を代弁するような台詞を投げつけます。このときヨブは、すべての理解者を失ったと言えるでしょう。

ここまでがプロローグの部分ですが、続くダイアローグの部分は見舞いに来た友人たちとの長い対話形式になっています。ヨブと三人の友人の会話は、語られた通りに書かれているわけではなく、文学的な編集が施されています。実際には両者の言葉が交錯し舌戦が繰り広げられていたと思われますが、著者は詩的表現をふんだんに用いながら、美しい文章として読者の心に訴えかけていきます。ここでの対話には重要なポイントがあります。プロローグで示された通り、ヨブに降りかかった災いは彼の罪深い生き方の結果ではなかったのですが（読者にはそのことが前提として伝えられています）、三人の友人はこの時代に一般的に考えられていた応報思想に基づいて、ヨブが何らかの罪を犯したからこのような目に遭っているのだと諭し、悔い改めを求めているということです。このお門違いの議論に苛立ちを覚えるよう、読者は促されているようにも見えます。もう一つの重要なポイントは、ヨブ自身は自分が神の御前に罪のない存在だということを主張しているのではなく、この度の災いの原因となるような罪を犯したことはないと訴えている点です。この主張を取り違え、ヨブが自分には罪がないと言っているように受け取っている友人たち。この平行線を辿る議論は、現在にも異なる形で存在するのではないでしょうか。また、このときにヨブが本当に求めていたことが、議論することではなく、彼が経験した苦しみの数々にただただ共感してくれる友の存在であったこと、何も否定せずにヨブの心の叫びを受け留めてくれる「慰め

主」であったということも、多くの人が苦しむ人に対して不適切な言葉を投げかけることでかえって傷に塩を塗ってしまっている現実を指摘しているかもしれません。

三人の友人との対話の後、突如として現れるのは第四の人物エリフ。彼が言っていることが正しいかどうかも精査しなければなりませんが、続く神ご自身からの応答につなぐ「架け橋」のような役割を果たしています。神からの応答にも重要なポイントがあります。それは、ヨブの苦しみの理由を最後まで明かさないということです。ただ創造の神秘を延々と語るばかりで、ヨブの身に起きたことへの具体的な言及は何一つありません。神の御旨の深みを人は理解することができないという結論でもって本書は締め括られるのです。

エピローグとして、ヨブは三人の友のとりなし手となり、以前にも増して祝福を受け、多くの子どもと財産が与えられるというハッピーエンドになっています。ヨブの苦しみの一部始終を見届けた妻が最後まで彼から離れることがなかったということも、注目に価するでしょう。

本論２．ヨブのひととなり

さて、以上の概要を念頭に置いて、今日の箇所を学んでみましょう。

ウツの地にヨブという名の人がいた。この人は完全で、正しく、神を畏れ、悪を遠ざけていた。
(1:1)

「**ウツ**」という地について、正確な位置は不明ですが、エドム人の子孫としてウツという人物がいたことから、アラビア半島北西部にあたるエドムのことではないかという説があります（創世 36:28)。また、もう一つの説としては、創世 10:23 にアラムの子孫として、創世 22:21 にアブラハムの兄弟ナホルの子として「ウツ」という人物が登場するので、ウツはアラム（シリア）付近の地域を指しているのではないかとも言われています。

ヨブが生きた時代はよく分かっていませんが、社会制度が単純であること、家畜が主な財産であり、家長が宗教上の祭司の役割を果たしていることなどから、モーセ律法によって社会制度が確立される前の「族長時代」の雰囲気が漂っています。族長時代を匂わせるもう一つの根拠としては、その時代にしか使われていなかった古いお金の単位である「ケシタ」という言葉が出てくることが挙げられます（42:11、創世 33:19)。実際、ヨブという名前は紀元前 2000 年期の西方セム語族の間ではごく一般的だったようです。

ヨブの「ひととなり」について「**完全で、正しく、神を畏れ、悪を遠ざけていた**」と言われています。「完全（ターム)」という言葉は「潔白」とも訳されますが、彼自身が自覚しているように神の御前で無罪だったということではなく（9:20)、「心に分裂がなく、ひたすら神を愛し、神に従いたいと願い、神の恵みを喜び、罪を犯すことがあっても神が赦しの手段を備えておられることを知ってそれにゆだねる人」（実用聖書注解）のことを言います。「正しく（ヤーシャル)」とは「まっすぐ」であること。特に対人関係において言葉と行動において首尾一貫していたということでしょう。「神を畏れ」とは、神に対して恐怖を抱いているということではなく、神を慕い求め、神を愛し、神を第一として生きることです。

彼には七人の息子と三人の娘があった。また、彼は羊七千匹、らくだ三千頭、牛五百軛、雌ろば五百頭の家畜を持ち、僕も非常に多かった。この人は東の人々の中で最も大いなる人であった。（1:2-3）

男子７人というのは当時理想的な数だったようで、完全性を象徴します。女子３人と合わせて 10 人であることも更なる力強さをイメージさせます。家畜においても羊七千頭とらくだ三千頭という割合が同様のことを意味していて、牛五百と雌ろば五百を合わせて 1000 になるところにも完全性が表されています。特に、雌のろばは子を産み、乳を提供し、荷物を運んでくれることから、雄よりも重宝されたようです。ヨブが、家族においても財産においても非常に富み栄えた人であったことがここに十二分に示されています。「東の人々」すなわち、ヨルダン川の東方、アラビア砂漠からユーフラテス川に至る地域に住む遊牧民の中で、誰よりも裕福でありました。

息子たちはそれぞれ自分の日に、その家で祝宴を催し、使いを送って三人の姉妹たちをも呼び寄せ、食事を共にするのが常であった。（1:4）

「自分の日」とは、いくつかの説がありますが、おそらくこれは七人の兄弟で一週間の一日ずつを受け持って食事の接待をする習慣だったのでしょう。例えば、月曜日は長男が、火曜日は次男が、水曜日は三男が……という具合です。そこに両親も招かれ、毎日が楽しく喜びの日であって、そのような生活が止まることなく継続されていたというのです。そんな日々がいつまでも続くと思っていました。

その祝宴が一巡りする度に、ヨブは使いを送って子どもたちを聖別し、朝早く起きて、彼らの数に相当する焼き尽くすいけにえを献げた。「もしかすると子どもたちは罪を犯し、心の中で神を呪ったかもしれない」と思ったからである。ヨブはいつもこのようにしていた。（1:5）

ここにはヨブの宗教生活の様子が描かれています。彼は喜びの日々の中にも、息子たちが何らか神に対して罪を犯したのではないかと案じ、定期的に一人ひとりのために、その人数に応じた数のいけにえを神にささげ、とりなしをしていたといいます。家族単位で神との関係が聖く保たれるように、常日頃から心がけていたのです。このように、家長が祭司的な役割を担っているところなど、族長時代の特徴をよく表しており、古代社会における敬虔な信者の生活が垣間見られます。「のろった」という言葉は原文では「祝福した」ですが、これは著者または後代の写字生が「呪う」という直接的な表現を使いたがらなかったがゆえの「言葉の変更」かもしれません。

【展開】

さて、このようなことが丁寧に本書のこれから始まる物語の前提として描かれているのは、先にも申しましたように、ヨブが誰からも責められるような人ではなく、その災いの理由となるようなことを何一つ行なっていないことを明らかにするためです。このことは読者に伝えられている事実でありますが、登場人物である三人の友人には知らされていません。そういう意味で、私たちはやや俯瞰的に本書の成り行きを見守っていくことになる。

聖書読者一人びとりの置かれた環境は違いますから、それに応じて読み方も変わってくるかもしれません。私自身は現在大きな苦しみの中にありますから、ヨブが直面した現実に部分的に深い共感を覚えるものです。肉体的な苦しみ、特に皮膚の問題というところで、彼がどれほど辛い思いをしたかがよく分かるのです。

私事で恐縮ではありますが、昨年の 11 月に入った頃から何となく顔の皮膚が突っ張る感覚を覚えていました。それが何によるものなのかが当初はすぐに分かりませんでしたが、服用していたものが体質に合わないことが実感としてピンときた瞬間がありました。それからだんだんと体全体に湿疹が出てきて、１月後半あたりから本格的に全身に赤みが広がっていきました。痛みと痒みで悶絶する日々が始まり、朝起きると枕カバーは血に染まり、目も開かない状態が続きました。２月に入ると症状がマックスになって、外出することもできない状態になりました。10 年前にも薬害で同じようなことになった経験がありますが、そのとき併発したコリン性蕁麻疹というのが厄介で、体が温まると全身が針で刺されるような痛みに襲われる症状が続きました。今回も全く同じようにその症状が出始め、これはまずいと思ったのですが、過去に奇跡的にコリン性蕁麻疹を治すことができた方法を思い出し、お風呂に入る度に冷水をかぶって、それが出てこないように対処しています。人間の体は、悪いものが表面に出てきたとき、多くの場合それを薬で抑える対症療法が一般的ですが、私の場合はその症状が出尽くして消えるまで待たなくてはなりません。その期間はまさに地獄ですが、いつかは抜けきるという確信を持って今回も辛抱しているところです。

私がヨブに対して共感を覚えられるのは、皮膚のことだけかもしれません。彼はその前に大切な子どもたちを失うという経験をし、財産も奪われ、無一文になった上、肉体的苦痛に苛まれているとき、三人の「友人」たちから「お前は何か悪いことをしたんだろう」と責められ、精神的にも極限まで追い詰められました。そのようなとてつもない経験をした人について、語り継がれ、不朽の名作となり、それを読む古今東西の人々の胸を打ってきました。順風満帆な人生を歩んでいる人がこのような書物を説き明かすことはできないかもしれません。その意味で、私に与えられた使命として、この書を学び続けたいと思わされています。

【結論】

私だけではありません。教会に集われるほとんどの方が何らかの苦しみを経験してきておられます。自分の体の問題、家族の悲しみ、経済的な困窮、いじめ……。いろんな災いが私たちの人生には降りかかってきますが、その物事の意味は地上にあっては分からないかもしれません。ヨブ記から教えられることは、無理に答えを出そうとせず、そこにこめられた深い神様の御旨があるかもしれないと、委ねていく信仰に立つことなのではないでしょうか。同時に、苦しむ人の心に寄り添うということも、誰かの「友」となるために教えられているように思います。

【祈り】

　すべての物事の真相を知られる天の父なる神様。私たち人間の目には、多くのことが隠されています。私たちは知っているようで何も知らないのかもしれません。また、時に大きな苦難に襲われ、その苦しみの中で叫ぶこともあります。その出来事の意味は理解しきれぬものばかりです。しかし、あなたの中には深遠なる御旨があり、すべてのことを働かせて益とすることがおできになります。今、何らかの苦しみの中にある人々に手を差し伸べ、その痛みを和らげ、またあなたに人生を委ねていく信仰を与えてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
全世界を支配し、同時に小さき者に心を留め給う、父なる神の愛、
神の子にして人となり、苦しみの極致を味わい給うた、主イエス・キリストの恵み、
順風の日にも、逆境の日にも、主に自らを委ねる信仰に立たせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。